

保育内容 5 領域をつなぐ視点の学び

—表現指導法の授業実践から保育内容総論とのつながりを試みて—

松本 亜香里 伊藤 喬治

要旨

保育者養成校であるH短期大学で1年次前期に開講されている「表現指導法」の授業において、5領域の説明を授業内で扱った週の受講生のリフレクションシートによると、5領域について小学校以降の教科的概念に当てはめて捉えている傾向がみられた。それは、学生が小学校から高等学校までの12年間教科教育を受けてきたため、自然と染みついた教育的営みに関する視点であろう。保育における5領域は、教科のような縦割りの視点ではなく、5つの側面から保育を捉える横断的な視点が望ましいと考える。本研究では、教科教育的教育観が染みついた大学入学間もない学生に対し、5領域に対し教科的概念を払拭し、5つの領域を相互に関連付けながら、子どもが充実して育つ姿を捉えるための5つの側面として捉えられるようになることを目的とし、実践から、授業展開のあり方を検討した。その中で、本研究で分析対象とした「表現指導法」の授業と「保育内容総論」の科目間連携として、教授内容と時期の重なりを活用し、教授方法のすり合わせを行ったことにより、実践結果から学生が多角的な視点で活動を捉えることができたと言える。こうした科目間連携の積み重ねにより、保育者養成校における各科目が「こども」ならびに「保育」を軸として組み立てられているということを、学生が気づき理解することにつながることが示唆された。

キーワード：5領域、5つの視点、教科的概念、表現、保育内容総論

1. はじめに

現在、保育者養成課程の多くでは幼稚園教諭免許と保育士資格の両方が取得できる。平成29年3月31日に幼稚園教育要領と保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時に改訂・告示された。この改訂により、三歳以上の教育の関する部分が共通化された。それまでは、養成課程において保育内容について指導をする際、幼稚園教育要領と保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領それぞれに説明がなされ、学生はそれらの内容を読み解き、幼稚園での保育内容のあり方、保育所での保育内容のあり方、認定こども園での保育内容のあり方について比較したり共通点を見つけたりして学びを深めていたと推察される。教授する側もそれぞれの保育施設を利用することもや家庭の背景も踏まえながら、それぞれの視点の違いや共通点、特徴について説明して

いたであろう。平成 29 年の共通化は、保育施設を利用することもちがいが同じ保育内容の視点から保育を受けられることになったというだけでなく、保育を学ぶ学生にとっても、学びがスリム化されることになった。

また、3 法令の改訂に伴い、教職課程コアカリキュラムが策定された。授業内容に含むべき事項が示されたことにより、養成校及び各教員の専門性を背景とした授業の独自性を担保しつつ、授業の方向性や内容が明確化されたといえる。一方で、これらの科目では、「幼稚園教育、又は幼児期の教育を指導する人材を確保」する必要がある、人事面で配慮が必要になる可能性も指摘されてきた。

筆者は、「表現指導法」を担当しているが、担当となった当初から、学生が 5 領域を教科として捉える様子が伺えた。「健康」は保健体育、「人間関係」は道徳、「環境」は理科、「言葉」は国語、「表現」は音楽や図工といったイメージがある」と、毎年課題として出している初回のレポート（1 年次 4 月に実施）の記載でそのように記されていることが多かったからである。そのため、必ず授業の導入として領域「表現」だけでなく、5 領域すべてに触れて、教科教育に小学校から高等学校まで 12 年間馴染んできた学生に対し、それとは前提となる視点が異なる、保育内容の 5 領域の概念を説明してきた。また、当該科目が指導法のため、指導計画立案に向けたねらいの設定や指導法の検討につながるよう、実践を交えた内容としている。これは、保育者養成課程に入学したばかりで保育現場の体験がほとんどない受講生にとって、話からイメージすることは、学びを進め深めていくうえで合理的ではないと考えたからである。

H 短期大学では、「表現指導法」は 1 年次前期に履修をする。その他、1 年次前期に履修できる保育内容は、「言葉」と「造形表現」と「音楽表現」と「保育内容総論」である。指導法としては唯一の科目であり、同時期に履修できる表現分野でもその他の科目が言葉と造形、音楽と分かれている。このようなカリキュラム構造となっていることも、教科的概念が払拭できないことにつながるのではないかと考えられる。

本稿では、保育の活動を取り上げ、5 つの領域を相互に関連付けながら、子どもが充実して育つ姿を捉えるための 5 つの側面として捉えられるようになることを目的とし、実践から、授業展開のあり方を検討することとする。

2. 表現指導法の実践内容と保育内容総論について

2-1. 表現指導法の実践内容

筆者が担当する「表現指導法」は、1 年次前期開講科目であり、幼稚園教諭ならびに保育士両資格の必修科目となっている。表現科目が「音楽」と「造形」、「身体」、「言葉」に分かれていることが他大学の公開されているシラバスからは散見されるが、H 短期大学では、指導法の科目においては「言葉」以外の表現分野を一人の教員が担当している。当科目のシラバスは表 1 に示したとおりである。入学したばかりの学生に、どのように保育な

らびに領域的概念を伝えていくのか、授業内容を毎年検討に検討を重ねるものの、教科的概念を払拭することは困難に感じている。

当科目では、表現することが主となる活動を授業内で受講生が体験をし、後に活動に付随するねらいを考えていく。表現を軸としながら、表現の視点に偏らないように、できるだけ各領域のねらいを挙げるようにする。教授内容を実際の保育活動の中でイメージすることは、実習も未経験かつ保育に関する学修に取り掛かったばかりの1年次前期の学生には困難だと考えるからである。体験する活動ならびに取り扱う保育教材は、上記にもあるように、「音楽」と「造形」「身体表現」が含まれるため、それぞれが主と考えられる活動を取り扱った。

表1 表現指導法のシラバス（2021年度用）

「表現指導法」（1年次前期・幼稚園教諭/保育士/卒業必修科目）

【テーマ・授業の到達目標】

テーマ：表現活動（音楽、造形、身体）の教材研究を含んだ指導計画立案および指導法を修得する

到達目標①：「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の教育や保育の基本を踏まえ、領域「表現」のねらい及び内容を理解する

到達目標②：表現する楽しさを自身の体験を通して知る

到達目標③：表現活動を多様な方法で展開するための知識や技術を修得し、乳幼児の発達を踏まえた援助やあり方を考え、学修する

【授業概要】

乳幼児が感性を育み、自分が感じたことを自由に表現できるには、保育者は乳幼児の成長や発達過程を理解し、適切な環境設定や援助ができなければならない。また、保育者自身がいろいろな表現を経験し、「楽しむ」ことが重要である。「楽しむ」中で表現活動や表現活動に用いる保育教材研究（情報機器及び教材の活用を含める）を深める基礎を本授業では修得する。さらに、乳幼児の成長を促すために必要な表現活動の援助や指導のあり方を「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」をもとに、受講者自らが考え、創造し、学修する。

【授業計画】

第1週：「表現」のねらいを理解する

第2週：「表現」の内容及び内容の取扱いを理解する

第3週：乳幼児の表現の場面を取り上げ、その背景や要因を考察する（グループ討議）

第4週：乳幼児の発達や学びの過程を理解し、表現活動のあり方や意義を考察する（グループ討議）

第5週：保育教材の活用（1）自然に触れ、感じ、自然であそぶことを体験する

第6週：保育教材の活用（2）音であそぶことを通して表現活動を創作する

第7週：保育教材と情報機器の活用（1）素材の特性を知り、身近な遊具や生活用具などを制作する

第8週：保育教材と情報機器の活用（2）身体を動かした表現を体験する中で表現方法の多様性を知る

第9週：表現指導法（1）音楽表現 活動の流れや援助指導法を研究する（グループ討議）

第10週：表現指導法（2）造形表現 活動の流れや援助指導法を研究する（グループ討議）

第11週：表現指導法（3）身体表現 活動の流れや援助指導法を研究する（グループ討議）

第12週：指導計画書の作成（1）表現活動にかかわる乳幼児の発達を理解する

第13週：指導計画書の作成（2）表現活動にかかわる指導の展開を考え、指導計画書を作成する

第14週：表現活動における模擬保育の実施

第15週：模擬保育の省察、まとめ（全体討議）

2-2. 5領域との関連づけ

本稿の当該科目である「表現指導法」と並行して開講されている保育内容の科目のうち、講義内容の中で3法令について触れている科目は「保育内容総論」のみとなっている。特に技法・技術を獲得する科目については、多数の保育者養成校において領域との関連づけが希薄だという課題が先行研究でも散見される。筆者も保育内容表現技術を担当していた頃は、目の前の技術獲得や技術獲得に向けた基礎知識の伝達に追われ、領域との関連づけに課題を抱えていた。そのため、他領域との関連づけまでは至らなかったのが現状であった。保育内容の表現に関する科目では、本来、ピアノ演奏技術を身につけることは必須とされていることはない。さらに、音楽理論を学ぶことも義務化されていない。しかしながら、こどもの表現活動の一つとして歌唱が含まれ、伝統的に園では先生がピアノを弾きこどもたちが歌うという場面が保育活動の中に含まれることが多いため、少しの練習や感覚でできるものではないピアノの演奏技術を養成校で身につけることが望ましいという考えで、各校がピアノのレッスンを取り入れていることは想像にかたくない。

保育内容総論の授業担当者と筆者は、幼稚園教育実習事前事後指導ならびに保育実習指導Ⅰ・Ⅱと一緒に担当している。実習指導では、実習の心構えや実習時の留意事項、事務的手続きだけでなく、日誌の書き方や指導計画の立案まで、指導内容が多岐に亘る。また、事後指導のための時間も用意しておかなければならず、すべての時間を事前指導に費やすわけではない。さらに、近年入学してくる保育者志望の学生の傾向として、生活経験が年々乏しくなっているように感じられる。これについて調査をしているわけではないが、箸や鉛筆、ほうきの持ち方、靴の脱ぎ方、雑巾の絞り方、裁縫などにおいて、実習指導時間内に実践的に学生が取り組む際、正しい持ち方や所作やマナーの面での指導に費やす時間が増えたことから、そう感じているのである。そのため、社会人としてのマナーや、基本的生活習慣、実習の心構えについて以前扱っていたように1週分の時間内で確認していきたいところを、それでは不十分となり、関連する場面で少しずつ分散して伝えること、またそれも一度ではなく、再確認することによって実施するようになっている。また、学外での実習で慣れない環境となることもあり、学生にとっては、こどもたちと遊べる楽しみよりも、2週または3週間やり切れるかというところに不安要素があり、その不安を拭えるように授業設定をしている。このような少しずつのフォローのための時間が積み重なることにより、指導案の書き方の部分で、本来1週かけて伝えたいと筆者が考える「こどもの姿」や「ねらい」の部分の説明が、その他の時系列で記入する記録の部分の説明と合わせて1週しか時間が設定できない現状にある。その後、実際にシミュレーションで書いてみるという時間は設けるのだが、「ねらい」の部分で5領域すべてに触れ、確認していくことは困難といえる。幸いにも、担当者二人ともが保育内容関係の授業を担当しているため、実習指導での課題を各担当科目で充足できている現状がある。

2-3. 保育内容総論との連携

H短期大学の「保育内容総論」のシラバスでは、表2のとおり、テーマが「保育内容に対する総合的な理解を深める」と設定されている。到達目標は、領域別の「ねらい」や「内容」について理解したうえで、こどもの遊びの意義や環境との主体的なかかわりなど「環境を通した保育」について学ぶことを目標としている。さらにこどもにとって、遊びは生活であり、生活自体が遊びであることから、保育者があそびを多様な視点で捉えることができるよう、生活経験と保育内容との関係について理解することも目標としている。

説明する相手や言葉が変わったり、ニュアンスが異なったりすると、同じことを伝えている場合でも、学生には同じように伝わらないことがある。そのため、筆者が気をつけているのは、同時期に開講する類似した内容を含む科目については、担当教員に自分が授業で伝えたことを共有したり、逆に、他科目でどのように伝えられているかを共有してもらったりしている。また、前述のリスクを避けるために、可能な限り近い日にちで内容が重ならないよう心がけている。このように「保育内容総論」担当者への確認行い、どのような内容や方法で5領域に関する説明がなされているかを共有している。例えば、「表現指導法」では、第1週と第2週のところで領域「表現」の「ねらい」と「内容」ならびに「内容の取扱い」に触れる。同時に他領域にも触れ、活動例を挙げ、その活動に含まれる表現面でのねらいを取り上げ、次に他領域でのねらいを取り上げる。この際、幼稚園教育要領や保育所保育指針等は、辞書的な活用法をとる。覚えることよりも、感覚として領域が教科とは異なり、例えば「造形の活動＝図画工作」ではないことを理解することを目的としている。造形活動においては、何かを作り上げる際、当然イメージをしながら作り、一人で作ることもあれば数人で作ることもある。数人で作れば、その過程で人とかかわる。一人で作ったとしても、作って終わりではなく、言葉で友達に工夫した点を伝えたり、感想を伝え合ったりする。また、作るということは、何かを観察して作る場合もある。そうすれば「環境」の視点が含まれる。さらに、作るためには身体を使う。このように、線から点を拾い、多角的に保育活動を捉えることができるよう、科目の前半で伝える。

「保育内容総論」では、第6週から第9週にかけて領域について詳しく触れている。前述の配慮から、「表現指導法」ではこの間、他領域について触れることはしない。両科目で一通り領域に関する授業内容が済んだところに、「表現指導法」の授業の中で実践された保育活動に対する「ねらい」を考える課題を提示する。このような、同一テーマについて若干の時期をずらしながら科目間でそれぞれの学問的視座から取り扱うことによって、保育における領域の概念を多角的な視点から検討し、その繰り返しによって横断的の学びにつなげることを想定している。また、5領域の概念の説明については、「表現指導法」だけでなく「保育内容総論」においても同様に、領域ごとの内容を押さえたうえで、活動からどのような領域固有の視点が考えられるかという問いかけも行っている。科目間連携として教授内容や時期の重なりを活用し方法をすり合わせることで、学生の学びがスムーズになるこ

とが期待できる。

表2 保育内容総論のシラバス（2021年度用）

「保育内容総論」（1年次前期・幼稚園教諭/保育士/卒業必修科目）

【テーマ・授業の到達目標】

テーマ：保育内容に対する総合的な理解を深める。

到達目標①：幼稚園教育要領における保育内容の「領域」別の「ねらい」や「内容」について理解する。

到達目標②：遊びの意義、環境との主体的なかかわり、生活経験と保育内容との関係について理解する。

到達目標③：情報機器及び教材の活用の視点を含め、保育教材に対する理解と基礎的な保育技術を修得する。

【授業概要】

本授業では保育活動の基盤となる「幼稚園教育要領」を中心に幼稚園における保育内容の基礎と内容を学ぶ。また保育内容の中核となる「領域」について概念を理解するとともに、保育そのものを総合的にとらえる視点、あるいは子ども理解の一助となるための必要な知識・技術を習得する。なお、授業内では複数の保育教材を取り上げ、自ら実践することで自身の保育技術向上も図る。

【授業計画】

第1週：幼児教育の基本

第2週：就学前施設と小学校との連携

第3週：遊びと子どもの発達

第4週：保育における環境構成

第5週：保育内容を支える教材の活用法（情報機器の活用を含める）①（手遊び）

第6週：保育内容における「領域」の定義

第7週：保育内容における「領域」の方向性

第8週：保育内容と「領域」における「ねらい」

第9週：保育内容と「領域」における「内容」

第10週：幼稚園教育要領と保育内容について

第11週：保育所保育指針と保育内容について

第12週：保育内容を支える教材の活用法（情報機器の活用を含める）②（パネルシアター・絵本・紙芝居）

第13週：指導計画と評価について

第14週：保育教材の展開①（絵本を用いての模擬保育）

第15週：保育教材の展開②（手遊びを用いての模擬保育）

3. 方法

筆者が担当する「表現指導法」の授業（13週目課題）で行ったレポートから、受講生が授業内で体験した活動からその活動でこどもが身につけることが期待される「ねらい」を考えた領域を整理する。その分析結果から、学生が5つの領域を相互に関連付けながら、こどもが充実して育つ姿を捉えるための5つの側面として捉えられるようになることを目的とし、科目間連携と授業展開のあり方を検討する。

調査協力者：2021年前期「表現指導法」履修者60名

（回収52名、回収率86.6%）

※研究での使用については、口頭にて説明、都合が悪い場合は名前記入欄右に

「×」印を記入するよう伝え、その場で名前ならびに同意の有無を記入してもらった。

実施時期：2021 年 6 ～ 7 月（11 週目に配布し 13 週目に回収）

分析対象活動：「表現指導法」内で行った保育活動「さんぽ」「手あそび」「レジ袋あそび」「新聞紙あそび」「小麦粉粘土あそび」「歌唱活動」の 6 つを分析する

レポート提示時の指示：

- ① 表現指導法の講義内で体験した活動に対し、それぞれの領域をふまえて「ねらい」を考え記入する。
- ② 「ねらい」を考える際、3 法令の各領域掲げられている「ねらい」や「内容」を参考に、自分なりに考えて記入する。
- ③ 各活動に対し、全てに 5 領域が該当するわけではない。2・3 の領域のねらいが考えられることもあれば、5 領域すべてが考えられることもある。また領域をまたぐねらいも当然出てくる。これらを踏まえ、横断的で柔軟な視点でねらいを考えること。

4. 分析結果と考察

「表現指導法」の授業内で行った領域表現が含まれる活動のうち、受講生が考えた「ねらい」を集計したところ、表 3 のとおり、全体的に 15%弱から 25%強の間に分布されていることが分かる。これは、活動に対する受講生が考えた「ねらい」の数が、活動によって差があるため、割合を算出した。「ねらい」の視点となる領域が 5 つあるため、単純に計算すると 1 領域あたり 20%程度になると、各領域が均等に近い分布となる。

表 3 「表現指導法」受講生が考えた保育活動に対するねらい集計一覧

	さんぽ	手あそび	レジ袋あそび	新聞紙あそび	小麦粉粘土あそび	歌唱活動
	n=253	n=199	n=206	n=222	n=234	n=230
	$\bar{x}=4.9$	$\bar{x}=3.8$	$\bar{x}=4.0$	$\bar{x}=4.4$	$\bar{x}=4.6$	$\bar{x}=4.5$
健康	23.3% (59)	21.6% (43)	23.8% (49)	23.9% (53)	22.6% (53)	19.1% (44)
人間関係	24.5% (62)	16.1% (32)	18.4% (38)	19.4% (43)	17.5% (41)	18.7% (43)
環境	20.6% (52)	19.6% (39)	19.9% (41)	20.7% (46)	18.8% (44)	20.0% (46)
言葉	15.4% (39)	18.1% (36)	14.6% (30)	13.5% (30)	14.5% (34)	17.8% (41)
表現	16.2% (41)	24.6% (49)	23.3% (48)	22.5% (50)	26.5% (62)	24.3% (56)

表現指導法の授業内で行った近隣の公園への「さんぽ」では、「さんぽ」に付随する活動について、受講生は「歩く」「観察する」「交通ルールを守る」などが口頭で挙げられていた。しかし、実践を振り返りながら受講生が考えた「ねらい」では、「歩く」の視点が含まれる健康は2番目に多く挙げられており、一番多かった領域は「人間関係」であった。これは、道中に2列縦隊で歩いたため、隣の人と話しながら歩くことや、発見した草木、川にいる魚などについて共有し、気持ちを共感することなどから挙げられたと考えられる。自然豊かな公園へのさんぽであったため、「環境」が上位にくるのではないかと筆者は考えていた。そうではなかった背景として、実施時期がコロナ禍での2021年5月のまん延防止等重点措置期間明けにより、普段人とのかかわりや外に出ることが当たり前であり、楽しみとも感じている学生にとって、大学で友人たち一緒に学外での解放された活動であったことが考えられる。これは、こどもたちについても同様のことが生じるのではないだろうか。普段園内で保育活動をしているのが当たり前のこどもたちにとって、園外保育は特別なことであり、楽しみにするこどもも少なくないからである。だからこそ、注意が散漫になることを想定して「交通ルールを守る」など「健康」の領域でも、「歩く」などの動作よりも多く「交通ルール」が挙げられるのであろう。

「手あそび」では、実践した手あそびが人とのかかわりをもつタイプのものは少なく、手あそびの表現を楽しんだり、発達や体の動きを意識した手法を学んだりすることに重点を置いていたため、「人間関係」のポイントが少なく、「表現」や「健康」が高かったと考えられる。

「レジ袋あそび」と「新聞紙あそび」では、素材を工夫して使ううえで、自分の身体をどのように動かして素材の特性を活かすのかという内容のねらいが多く「健康」のポイントが高かったと考えられる。次に、思い思いの形を作ったり、遊び方を工夫したりして遊ぶということから「表現」が挙げられていると考えられる。さらにレジ袋や新聞紙など、素材そのものの特性を捉え、観察し、こどもなりに研究するという点から「環境」のポイントが高い傾向にあると考えられる。

「小麦粉粘土あそび」では、造形の活動が主であるため「表現」のポイントが高く、次いで作り上げる過程において、混ぜることやこねることなどの動きが伴うため「健康」が上位に挙げられている。また本活動は、「小麦粉」の素材そのものの感触を楽しむことを第一段階に設定した。次に塩を加えた手触りや水と混ぜ合わせる段階での感触、油を加えた時の手触りや弾力を味わうことにも、筆者がねらいを置いていたため「環境」が上位に挙げられていると考えられる。

最後に「歌唱活動」では、歌うことが音楽をツールとした表現につながり「表現」が上位に挙げられた。興味深いのが、「言葉」や「健康」よりも「環境」が上位に挙げられたことである。歌詞のある歌を歌うことは、当然「歌詞」に触れる中で、いろいろな言葉に出会い時には新しい「言葉」を獲得することもある。しかしながら、受講生が考えたねらい

を読むと「歌詞を味わう」など表現面での視点は多くみられるものの、言葉の獲得に関する視点はさほど多くはない。それよりも、「歌詞に登場する物や情景」「季節を感じる」などの視点が多くみられた。さらに、歌唱そのものが身体活動であり息遣いや声の出し方、加えて歌唱姿勢の適正云々は別として、拍を感じる時に身体を揺らすなど「健康」にかかわることもあるが、4位の「人間関係」と1票しか変わらない結果となっている。

以上のように、活動内容によっては、筆者のねらいが影響したと考えられるものも見られるが、全体的に領域の偏りが大きく出ず、5つの領域を視点として捉えている傾向がみられた。これは、当初のねらいであった「多角的な視点でこどもの姿や活動を捉える」ことにつながっていると考えられる。筆者が課題と感じていた、教科的概念を払拭することにつながるのではないだろうか。

保育内容総論の授業においては、受講生の授業中の反応、またリフレクションシートでは、他の授業と相似した内容・重複するような内容を扱っていることや、他の授業の内容と関連づけていることに違和感を覚えているような様子が散見された。カリキュラムに配置されたそれぞれの科目や授業の関係は、それぞれが孤立し干渉しない、別方向のベクトルによって作られたレーダーチャートのようなものである、という旧来の教科教育的な視点が見られること、またそれらが最終的に保育実践のための理論として個人の中で統合されていくという俯瞰的な感覚が持ちにくい様子であることが見受けられた。しかし、授業が進むにつれて、各科目間がもつ相補的な要素に気づき、他の科目で学んだ内容について再度異なる視点から扱うことや、それによる知識の再構成化を自明のものとして受容していく様子も見られる。

5. まとめ

大学入学間もない学生に5領域の説明を授業内でした週のリフレクションシートには、教科的概念に当てはめている傾向がみられた。それは、学生が小学校から高等学校までの12年間教科教育を受けてきたため、自然と染みついたからであろう。保育における5領域は、教科のような縦割りの考えではなく、5つの側面から保育を捉える横断的な視点が望ましいと考える。本研究では、教科教育が染みついた大学入学間もない学生に対し、5領域に対し教科的概念を払拭し、5つの領域を相互に関連付けながら、子どもが充実して育つ姿を捉えるための5つの側面として捉えられるようになることを目的とし、実践から、授業展開のあり方を検討した。その中で、本研究で分析対象とした「表現指導法」の授業と「保育内容総論」の科目間連携として、教授内容と時期の重なりを活用し、教授方法のすり合わせを行ったことにより、実践結果から学生が多角的な視点で活動を捉えることができたと言える。こうした科目間連携の積み重ねにより、保育者養成校における各科目が「こども」ならびに「保育」を軸として組み立てられているということに、学生が気づき理解することにつながることを期待されよう。

参考文献

- 1) 無藤隆他保育教諭養成課程研究会編 (2017)「幼稚園教諭養成課程をどう構成するか～モデル カリキュラムに基づく提案～」萌文書林
- 2) 小川博久 (2013)「保育者養成論」萌文書林
- 3) 當銘美菜他 (2021)「保育内容指導法 (健康・人間関係・環境・言葉・表現)」における科目間連携が育む教員の同僚性」目白大学総合科学研究 17 号、pp.13-24
- 4) 谷口征子 (2020)「保育者養成校における科目間連携授業の意義：乳幼児の遊びをテーマにして」保育文化研究 10 号、pp.133-143
- 5) 柴田卓他 (2018)「保育者養成校における 実習を中心とした科目間連携に関する研究」郡山女子大学紀要 54 号、pp.117-133
- 6) 高橋さおり、清水桂子 (2015)「保育内容の総合的な理解を目指した保育者養成の検討－「保育原理」と「保育内容人間関係」の科目間連携を通して」北翔大学短期大学部研究紀要 53 号、pp.89-95
- 7) 采畢真澄 (2020)「保育者養成校における「5 領域」の総合的な学びに関する予備的検討」現代教育学部紀要 12 号、pp.105-110
- 8) 高山静子 (2014)「科目「保育内容演習」の教授目標と内容の研究」ライフデザイン学研究 10 号、pp.125-138
- 9) 源証香、小谷宜路 (2014)「「保育内容」研究のあり方に関する一考察 保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から－」埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 13 巻、pp.9-15
- 10) 遠藤知里、長橋秀樹他 (2011)「相互性を重視した「保育内容研究」授業の実践：領域「表現」から 5 領域を結び合わせる試み」常葉学園短期大学紀要 42 号、pp.131-138